

エッセイスト 岩田 裕子

春の旅行にて

早春のニューヨークは、東京より肌寒く、空気は確かに春なのに、木々はまだ芽吹いていない状態でした。摩天楼が両側にせまり、見上げてビルの上まで視線が届かず、せまくるしく感じられるほど、迫力があります。超高層ホテルの部屋から見ると、イエローキャブの黄色い渋滞が、街を結ぶ春のリボンのようにみえるのです。

ちょうどイースターの直前のころで、磔刑のキリストを中心とした十数人の仮装行列をみかけました。世界一ハイテクな街と、2千年前のドラマティックなエピソードの対比。

そういえば、1939年に封切られた映画『オズの魔法使い』の50周年を記念したパレードは、道路を封鎖し、ニューヨークのミッドタウンで祝典がひらかれ、全米から人が集まったといいます。

5千人もの参加者が、それぞれオズの登場人物に扮し、タップを踏みながら、34丁目を行進したのです。1989年8月のある日。パレードを見る子供たちも、ドロシーと同じ赤い靴をはいておおはしゃぎし、大人たちも、かかしやブリキの木こりに扮して、楽しんだのだとか。大人な街ニューヨークのファンタスティックな一日。

帰国前夜、やっと取れたチケットで、念願のブロードウェイ・ミュージカルを見ることができました。『Wicked-ウィキッド』。あの『オズの魔法使い』の前日譚です。2003年、ニューヨーク・ガーシュイン劇場で幕を開け、グラミー賞を受賞。もう10年もたつというのに、今も同じ劇場で連日、満員御礼なのです。

南の良い魔女グリンドと西の悪い魔女が、大学で同級生だったというお話。魔法たちが魔法の授業をうけたり、寮生活したり、恋愛したり、先生はしゃべるヤギだったり、現実世界と幻想が渾然とした舞台。オズに心酔している女流作家の原作です。

1939年の映画『オズの魔法使い』では、西の魔女に、マーガレット・ハミルトンという女優が扮し、黒いとんがり帽に緑色の顔で、笑いながら箒ののって空を飛んでいます。マーガレット・ハミルトンのインタビューを見たことがあります。とても上品な老婦人で、良い魔女役の人かと勘違いしたほどです。この悪い方の魔女が、『ウィキッド』のヒロイン、エルファバなのです。生まれもっての緑色の肌で気味悪がられますが、実際は、まじめで誠実、妹思い



南のよい魔女グリンドちゃん

イラスト/岩田 裕子

の優しい性格の娘でした。体の弱い妹は、後年、東の悪い魔女と呼ばれるようになります。学校の寮で、エルファバは、可愛い女の子、グリンドと同室になります。南の魔女、グリンドです。

このグリンドの、愛されキャラぶりが、面白かったです。着る服は、白やピンクなどパステルカラー。金髪の巻き毛をゆらゆららし、感じがよく、誰にでも好かれるのです。女の子らしくて、きれいなグリンド。自分勝手、ずるいところもあり、でも優しさももっている。悪人ではもちろんないですが、ちょっと調子がいい、という感じ。まわりの思惑もあり、どんどん良い魔女にたてあげられていきます。

名誉も賞賛も手に入れながら、グリンドの一番欲しいものは、エルファバの手にはいりませんでした。人々に愛され、あこがれられ、贅沢三昧も経験しながら、少しだけ不幸なグリンドに、私は興味を惹かれます。

一方、自分に正直で、周りに誠実すぎるエルファバは、こわい容姿とアピール下手のため破滅の一途をたどります。しかし、信念のままに生きた彼女は、満足だったにちがいありません。そのうえ、いちばんほしいものを手にすることができたのです。

この対照の妙！

エルファバは、長い箒と黒づくめの衣装がトレードマーク。グリンドは、ダイヤモンド

ドでできた魔法の杖と、きらめくティアラがおきまりです。

宝石が似合う人は、みなどこかグリンド的な要素をもっている。そんな気がします。

魅力的ではあるけれど、ちょっと悪い子だったりもするのです。

アメリカの神話

『オズの魔法使い』については、以前、Gニュースにも書かせていただいたことがあります。カンザス生まれのヒロイン、ドロシーが目指す「エメラルドの都」をはじめ、宝石がふんだんに登場するお話だからです。

『オズ』シリーズは、読者の希望により、続編が14作も書かれています。今回、新しく翻訳されていたので、それも読んでみたら、一作目に引けを取らないほど、奇抜なストーリー、登場人物、色彩的にもカラフルで、すっかり魅了されてしまいました。

この明るさ、元気さは、一体なんでしょう。

オズが出版されたのは、1900年。ヨーロッパ的には、まさに爛熟の19世紀末です。しかし、1776年に独立宣言したばかりのアメリカにとっては、日の出の勢いのときでした。1867年には、アラスカをロシアから購入。1898年にはハワイ王国を統合し、スペインとの戦争に勝利してグアム、フィリピン、プエルトリコを植民地化。キューバを事実上支配するなど、アメリカ自体がアメリカンドリームに酔っていた、上昇一途の時代だったのです。作者のボウムは、ニューヨーク生まれでしたから、そういう時代の空気をふんだんに吸って、生きていたのではないのでしょうか。

アメリカンスピリットで描かれた、世界初の童話『オズ』は、アメリカ人の気分によく合い、ドロシーは国民的ヒロインとなりました。かかしやブリキの木こり、臆病ライオンや、詐欺師のオズも、アメリカ人なら誰でも知ってる人気キャラクターとなったのです。

『ウィキッド』を待つまでもなく、オズに触発された作品は、あちこちに散らばっています。『ウィズ』は、ニューヨークを舞台に、ダイアナ・ロスがドロシー、マイケル・ジャクソンが、かかしに扮した黒人だけのミュージカル。『リターン・トゥー・オズ』は、『オズのオズ

マ姫』などを忠実に映画化した、1939年の続編のような映画です。

2013年3月には、やはり前日譚である『オズはじまりの戦い』が封切られ、8月にはブルーレイが発売になります。

過激な暴力や性描写で有名な、カルトの帝王ともよばれる監督デビッド・リンチの『ワイルドアットハート』(1990年)は、全編、オズの魔法使いへのオマージュでつくられています。私の感覚では、過激というより、切ない恋物語なのですが、児童文学とは対極にあることは確か。殺人罪で服役しているニコラス・ケイジの前に、グリンドアがあらわれ、やさしくことばをかけるシーンも。「あなたに、ワイルドな血が本当に流れているなら、あなたは夢のために戦うことができる」と。悪夢のような作風で知られるデビッド・リンチですが、彼もまたモンタナ州生まれのアメリカ人です。

オズは、アメリカ生まれの神話になったのではないのでしょうか。カンザス生まれのドロシーは、鬼退治する桃太郎や、西国をめざす孫悟空と同じく、子供たちや昔、子供だったアメリカ人たちの永遠の英雄なのだと思われるのです。

それにしても、オズのシリーズには、宝石の話がふんだんにできます。

オズの世界は、エメラルドの都と、その周りの4つの国でできあがっていますが、グリンドアの統治する南のクワダリングは、赤の国です。ちなみに、ドロシーが竜巻で到着したマンチキンの東の国は、すべてが青、西の魔女がおさめていたウィンキーは黄色、北のギリキン人は紫が好き、という設定になっています。

赤の国の女王である、良い魔女グリンドアはルビーの玉座にこしかけています。原作につけられたダンスロウのオリジナルのイラストでは、ハート型のルビーが王冠にも、服にも縫い付けられています。また、グリンドアの宮殿は、どこもかしこも豪華で美しい庭には、噴水から水ではなく、宝石が吹き上がっているとのこと。

オズ・シリーズ第二巻では、エメラルドの都に、ジンジャー将軍という美少女ひきいる各地から集まった美少女軍団が、攻め入ります。彼女たちの武器は、まとめた髪の毛のなかに刺した編み棒。目標は、エメラルドの都にあるきらめく宝石です。都のあちこちには、エメラルドが埋め込まれています。それらをほりだし、指輪やブレスレットにしたい。それに、王の金庫には、たくさんの黄金があるから、それをつかえば、隊員ひとりひとりに、新しい服が10着ずつは買える、とのこと。作者のボームは、どうしてこれほど女性の願いがわかるんでしょう。



ドロシーが迷い込んだ、魔法のケシの花畑
イラスト/岩田裕子

グリンドアの軍隊が鎮圧にむかうと(こちらにも美少女軍団ですが、もっと統率がとれています)、反乱軍は、編み棒の先で、壁や石畳の道からエメラルドを掘り出しているところでした。

ジンジャーの乱を鎮圧後オズの国を統治するオズマ姫は、宝石のように美しい少女でした。二つの目はダイヤモンドのように輝き、くちびりはピンクのトルマリンのような色合い、そのおでこには、宝石のついたティアラが輝いているのです。彼女は、敵方のノーム王にエメラルド製のバツァへ変身させられたことがあります。

『空飛ぶ猿』の昔話にでてくる、ゲイレットという美しい姫は、ルビーの大きな石を積んで建てた、美しい宮殿に住んでいました。姫の悩みは、自分に似合うお婿さんにであえないこと。あるとき、賢くて男らしい美少年クエララを見つけ、このルビーのお城に連れて行き、たくましく、優しく、頼もしい青年に育てたのです。

ラングディア姫は、ルビーの塊をほって作った不思議な鍵で、大事な戸棚をあけるのです。そこには、美しい頭がずらっとならんでいました。さまざまな髪色、肌や目の色、その日は、17番の頭を取り付ける。黒髪に黒い目、肌は真珠のようにしろくつややかな首をえらび、満足して鏡をみました。

カラスの巣に不時着したカカシは、きらきらの指輪を見つけます。こちらでもオズの世界でも、カラスはキラキラしたものが好きなのです。また、ルビーやアメシストやサファイア、同行したブリキのきこりは、ダイヤモンドのネックレスだけで大満足しました。

めんどりのビリーナでさえ、ある国の新しい王から感謝の気持ちとして、真珠とサファイアでできたネックレスを贈られる、など。ふーっ。宝石のエピソードは枚挙にいとまがないのです。

行動の人、ボーム

いろいろな本を読んでいます。これほど宝石をふんだんに登場させる作家は、本当に珍しいです。ライマン・フランク・ボームは、オスカー・ワイルドや宮沢賢治にも匹敵することに、今回、気がつきました。どんな人なのでしょう。

ボームは、夢想家ではあったのかもしれませんが、思索家ではけっしてなく、行動の人でした。彼の生涯も、波乱に満ちたものでした。

彼は、ニューヨーク州のチネタンゴという小さな街に、9人兄弟の7番目として生まれました。父は、ペンシルベニア州の油田で財を築いた人で、非常に裕福な家庭でした。屋敷には、見事な薔薇園もあったのです。生まれつき、心臓の悪いボームは、豪壮な邸宅で、家庭教師に教育を受け、読書や物語の創作にふけるという子供時代をすごしました。12歳で、士官学校にはいりますが、体調のせいですぐに退学。14歳ごろ、父親に小型印刷機を買ってもらい、弟とともに、「薔薇屋敷通信」という地方新聞を発行しました。17歳で、切手の収集家のための雑誌を発刊。20歳で、養鶏をはじめ、鶏の飼い方に関する書籍を出版したりします。オズのメンバーにめんどりのビリーナがいるのは、だからでしょうか。

24歳のとき、父が劇場を買ってくれたので、ボームは劇団をつくり、ミュージカルを自作演出し、地方巡業もしました。26歳で結婚。その後、劇場が火事になり、建物のみならずボームの脚本の多くも焼失してしまいます。

ホームグラウンドをなくしたボームは、さまざまな事業をこころみますが、いずれも失敗し、財産を失います。西部にうつり、新聞を発行しますが、これも失敗。シカゴに転居。さすらいのセールスマンも経験します。

この頃の経験が、手品師オズの造形にやくだったのかもしれませんが。オズのような、どうしようもないパテン師と、出会ったことがあったとしても不思議ではないのです。

オズのイラストレーター、ウィリアム・ウォレス・ダンスロウと出会ったのは、商店の装飾専門誌を編集していたときでした。ふたりは子供のための童謡集、『ファーザー・グース』を出版。ベストセラーになり、翌年、『オズの魔法使い』を出版するのです。

裕福な資産家生まれだったことから、ボームが宝石と身近に接していたとしても不思議ではありません。また、ボームは美的感覚にすぐれていたもので、自然と宝石に興味をもったのでしょう。

もう一つ、考えられることは、ボームはかなりあたらしがりやだったことです。1900年前後は、自動車や、無線などが次々実用化されていった時代。ジャーナリストでもあったボームは、時代の最先端を捉え、オズシリーズにも、手足に車がつき、ドロシーを猛スピー

ドで追いかける車人間や、無線、ロボットなども登場させています。彼はまた、後年、映画製作にも手を染め(そのために借金が増えるのですが)、オズ・フィルムカンパニーという会社を設立しています。最初のオズ映画は、ボーム自身の手で作られたのです。宝石も、当時のアメリカでは、ホットな話題だったのではないのでしょうか。高名な宝石学者、ジョージ・クンツは、1858年生まれで、ボームと同年代、同じニューヨーク育ちです。クンツは、アメリカ産の宝石を探すため、アメリカ中を探し回りました。カリフォルニアを旅行中に、クンツァイトを発見しています。他に、メイン州ではトルマリン、ユタ州ではトパーズ、ニューヨーク州ではガーネットと、行く先々で新しいカラード・ジュエルストーンを発見した。彼がもっとも積極的に捜し求めたのは淡水真珠で、テネシーやオハイオの川でこれを発見しています。クンツが収集した貴重な鉱石の標本は、ティファニーによって、1889年、1893年、1900年の万国博覧会に出展されています。こうしたニュースに、ボームは触発され、アメリカ産の宝石童話を作り上げたのではないのでしょうか。ドロシーのはく魔法の靴は、原作では、銀の靴ですが、映画でドロシー役のジュディ・ガーランドは、赤い靴を履いています。映像的に、赤のほうが効果的だからですが、オズの原作には、エメラルドと並び、ルビーが数多く登場しているので、ボームも生きていたら、賛成しただろう、と思います。1989年の、映画50周年記念のとき、ハリー・ウィンストンが、ドロシーのルビーの靴を作りました。全部、本物の極上のルビー3000個で作られた当時300万ドルしたとのこと。まるで、オズの世界の宝石が魔法でこの世にあらわれたみたいですね。宝石好きのボームが見たら、どんなに喜んだことでしょう。

近況

4月より、新しい歌舞伎座通いに邁進。ひさしぶりに一堂に会した名優たちの演技、すばらしい舞台、そして衣装に酔いしれています。

3年もの長いお休み期間に、亡くなられた名優の方たちを思いだすと、涙ぐんでしまうこともしばしば。

前の座席にくっつけて字幕や説明がみられる機器は、とてもおすすめです。

ここ最近の旅行は、古式ゆかしい阿蘇神社、天照大神がおわした高千穂、また東大寺をくまなく周り、国宝の仏像たちのオーラに、ふらふらになりました。ことに、この5月から解禁になった東大寺法華堂の帝釈天が、すばらしい。その光は、まっすぐ私の心の奥底まで届き、私自身さえ知らない、心のすきまに潜む思いまで、みすかされていそうで、しびれて動けないのか、あまりの心地よさに動くことができないのか、わからないままじっと佇んでいました。

今も、真夜中、ふと、法華堂の間にひそむ帝釈天の瞳を思い、嬉しい気持ちになります。



岩田 裕子 (いわた ひろこ)

「宝石とは、美しさ、そして夢」と考え、様々なキーワード—ギリシャ神話から名探偵ポワロ、バレエや競馬、ピーターパン、王女さまに魔術まで—を駆使して、宝石の魅力を解き明かしている。

慶應義塾大学西洋史学科卒業後、編集者を経て、エッセイストに。宝石に関する著書は、「夢見るジュエリ」「ダイヤモンドAtoZ」(共に東京書籍)、「宝石物語」(大和書房)、「21世紀の冷たいジュエリ」(柏書房松原)、「恋するジュエリー—スターが愛した宝石たち」(河出書房新社)など。ほかに、妖精、花の本、絵本の翻訳、ショートストーリーの執筆も。文章にあわせ、イラストも描いている。

ホームページは

<http://www.shinjukutoyama.com/>

ジュエリーと妖精、そして幻想の世界へ

と

<http://www.geocities.jp/yamaneko1313>

ジュエリーや妖精に関するエッセイスト、岩田裕子で

岩田裕子 著 (電子書籍) ^{こわく} 蠱惑のジュエリ



定価:599円(税込) 発行:PHP研究所
2012年9月、電子書籍「蠱惑のジュエリ」が出版されました。